アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について

今里悟之（大阪教育大）・池中香絵（大阪大・院）・
岡本有希子（大阪大・院）・小林　茂（大阪大）

1.　資料の調査と作業の経過

2007 年 9 月に、今里と小林は、ワシントンのアメリカ議会図書館（Library of Congress）に所蔵されている日本軍の航空偵察写真の調査を行った。これに際しては、アメリカ議会図書館目録部（Cataloguing Division）、日本課（Japanese Section）の藤代真苗さんに終始お世話になった。

調査に際しては、パソコンと A4 版のスキャナーを持参して、資料をスキャンし、日本に持ち帰った。大部分はサイズが大きく、分割してスキャンをおこなった。岡本がこれらの目録を作製し、さらに池中が目録のエクセルファイルを作成するとともに、撮影地点の特定も行った。撮影地点の特定には、Drazhnyuk A. A. et al. ed. (1999) *The World Atlas.* Moscow: Federal Service of Geodesy and Cartography of Russia を使用したが、写真に記入されている地名の多くはカタカナ表記であるため、それからローマ字による表記を推測し、*The World Atlas* の索引を検討した。ただしこれは、容易な作業ではなく、まだ地名の特定が出来ていないものが多く残っている。

なお、2008 年 3 月に小林がアメリカ議会図書館を再訪したときには、上記資料の不明な点を確認するとともに、新たに上記藤代真苗さんより紹介された資料について簡単な調査をおこなった。藤代さんは、2007 年 9 月に私たちの関心を知り、類似の資料を集めて下さっていたのである。藤代さんのいきとどいたご配慮に感謝したい。

以下 2007 年 9 月に調査をおこなったものもふくめてまず関連資料の概要を示す。

2.　資料の概要

資料はすべて U21, 4261 という番号を付され、複数の厚紙でつくられた箱に収められている。以下仮の記号をつけて順に述べる。

資料Ａ：2007 年 9 月に調査をおこなった資料で、内容は添付の目録に示している。「豪州西北部飛行場要覧」という表紙をもつ一連の台紙に貼られた写真にくわえ、他の地域に関する、やはり台紙に貼られた写真をともなう。

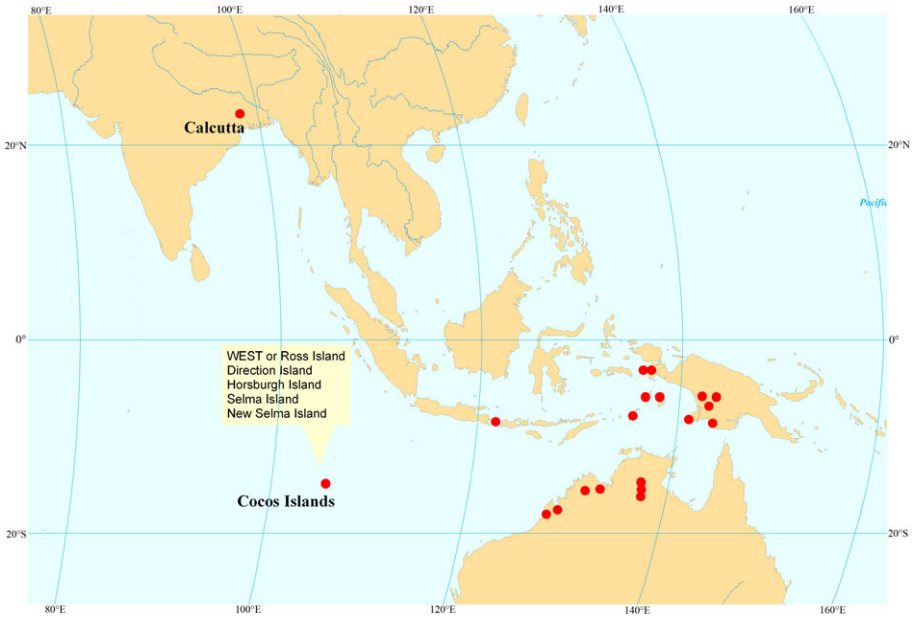

図 1　撮影地点の分布

●：撮影地点

前者の表紙には中央に縦書きで「豪州西北部飛行場要覧」と記し、右には「昭和十八年二月」、左には「獨立飛行第七十中隊」と記す。32×50 cm 大の台紙の両面に写真を貼り付ける場合が多く、目録では表と裏を区別して示している。全部ではないが、表側の写真には括弧つきの番号を示している。この点から、表側と裏側では別々のシリーズの写真が貼り付けられた可能性がある。作製当初は、紐か糸で綴じられていたと考えられるが、現在はこれがなくなっており、写真が当初の順序を反映しているかどうかは、明確でない。また表紙にみえる昭和 18（1943）年 2 月以降に撮影されたものをかなりふくんでいるのも留意される。これらは、当初に綴じられていた「要覧」には含まれていなかったであろう。なお、撮影地点をみると、イリアンジャヤおよびその周辺の島嶼が多く、オーストラリア本土のものはすくない。この点は資料Dと比較するとあきらかである。今後は、つぎに述べる資料Bとの関係をさらに検討すべきであろう。

他方、後者はさまざまな地域の写真を台紙に貼り付けたもので、インドのカルカッタのものもふくまれる。また台紙のサイズもさまざまで、とくにCocos島に関するものは、「其一」、「其二」では 45×55 cm、これらの元図と考えられる 2 枚は、39.5×55 cm と大きい。また「コラカ礦山」は、不整形で 45×40 cm である。これらのうち昭和 18（1943）年 2 月以降に撮影あるいは編集されたものも、のちにこのグループにくわえられたものであろう。

資料B：2008 年 3 月に調査したものである。やはり「豪州西北部飛行場要覧」というタイトルをもち、昭和 18 年 2 月、という日付や「獨立飛行第七十中隊」という記載も同様である。台紙に穴を空けて綴じてあるもの（ダーウィン飛行場から開始）とひもで括られているもの（カセリン飛行場から開始）、さらに綴じられていない台紙 7 枚と大型の台紙 2 枚（ブルーム飛行場とホーランヂャ飛行場の写真を貼り付ける）がある。

資料Aと資料Bとの関係については、さらに資料Bの内容を精査する必要があるが、一方が他方の副本というよりは、両者は一体のもので可能性が高いと考えられる。

資料C：2008 年 3 月に調査したものである。やはり表紙に「豪州西北部飛行場要覧」と記し、左側に「獨立飛行第七十中隊」とあるが、右に「昭和十七年十月至十二月」とあり、資料Aや資料Bよりも早い時期のものと考えられる。最初に全 34 点の写真一覧があり、2 頁目と 3 頁目に折りたたんだ一覧図も添付している。これが納められた箱にはもうひとつ二つ折りの大型の紙があり、それにはカルカッタ（インド）の空中写真が貼られている。撮影者として渡辺中尉・阿倍中尉とあるのは、資料Aの「カルカッタ港付近」の場合（目録参照）と同様である。

資料D：2008 年 3 月に調査したものである。やはり「豪州西北部飛行場要覧」というタイトルをもち、「獨立飛行第七十中隊」という記載も同様であるが、時期を「自昭和十八年十月至十二月」としている。この台紙に貼り付けられた写真の束は全部が綴じられており、最初に飛行場位置図、つぎに一覧表を載せる。全 34 枚あり、1 枚目はダーウィン飛行場、34 枚目はブルーム飛行場で、位置はいずれもオーストラリア領内と考えられる。資料C、資料Dともさらに精査が必要であるが、写真の点数から、両者は基本的に同じ内容のものである可能性があるが、撮影時点も確認する必要があろう。

資料E：2008 年 3 月に調査したものである。全 3 冊で、いずれも「ダーウィン附近爆撃目標」とタイトルを示し、「獨立飛行第七十中隊」と記すほか、昭和 18 年 2 月 20 日の日付を示す。うち 1 冊には「八部之内第四号」、もう一冊には「八部之内第七号」と記され、同じものが複数部つくられたものと考えられる。

以上、資料の概要について述べたが、資料B～資料Eについては、充分な調査をしておらず、今後機会を見てさらに調査したい。なお、2008 年 2 月の第 10 回外邦図研究会で、資料Aについて発表したところ、今井健三氏（水路協会）より、海上保安庁海洋情報部図書館にも類似の航空偵察写真があるとのことで、この調査も必要である。

3. 資料Aの目録について

資料Aの写真目録をつぎのように作製した。①タイトル（軍が写真に記入しているもの）、②地名の英

語表記、③国または地域の名称、④緯度経度、⑤一致する空港名、⑥サイズ（縦×横㎝）⑦撮影年月日、⑧縮尺、⑨操縦者名、⑩撮影者名、⑪高度（m）、⑫備考、である。②、③、④、⑤、については地名を特定した上で位置が判明したものについてこちらで付け加えたものである。⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫については、写真に記入されているものである。ただし、これらの情報については記入されていないものが多い。撮影年月日と操縦者・撮影者名はそろって記入されている場合が殆どであるが、半数以下しか記入されていない。

4.　撮影地点の分布と撮影の特徴

地点が特定されたものについて、地図を作製しその分布を示した。東南アジアを取り巻く形で東はニューギニア、オーストラリア、西はインドのカルカッタ、インド洋のココス諸島に偵察飛行していたことがわかる。情報が少ないため時期の特徴は捉えにくいが、確認できる最も初期のものは昭和 17 年 7 月 20 日にココス諸島で撮られたものである。ココス諸島にはその後も昭和18年8月にも偵察飛行しており、関心の高さが伺える。

また、当時の戦況と照らし合わせると、昭和 17 年 3 月に日本軍はニューギニアに上陸し、ポートモレスビーを拠点とする連合軍と激戦状態にあった。同年 7 月から、ニューギニア西部のイリアンジャヤ地方および西部の諸島に中心的に偵察飛行したようである。

5.　今後の課題

以上、藤代さんのご配慮により、予想外に多くの偵察写真が現存することを知ることができた。今後は資料Ｂ～資料Ｅ、さらに海上保安庁海洋情報部図書館の類似資料を調査し、日本軍の航空偵察資料について理解を深めたい。またニューギニアにおける日本軍と連合軍の戦闘を調査中の田中宏巳先生（防衛大学校）からもご指導をいただきたい。

なお、2008 年 2 月の外邦図研究会では、空中写真からわかる海岸の潮位から、温暖化による海面上昇についても検討が可能との示唆をいただいた。この方面からも検討の可能性をさぐりたい。

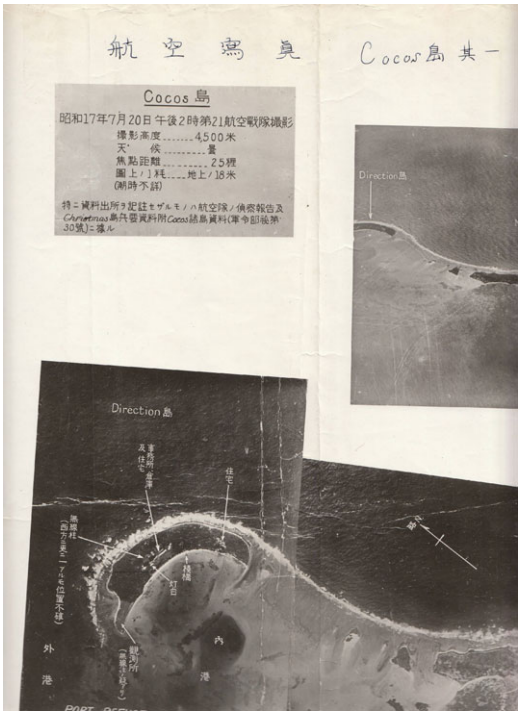

写真 1　Cocos 島　其一（左上部分）

写真 2　Cocos 島　其一（右下部分）